授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1737 号

A comparison of laparoscopic-assisted and posterior sagittal anorectoplasties for male imperforate anus patients according to fistula type: recto-prostatic versus recto-bulbar

(男児高位／中間位鎖肛に対する腹腔鏡補助下肛門形成術と後方矢状切開法との術後成績、特に直腸尿道瘻と直腸球部瘻についての比較検討)

矢崎　悠太（やざき　ゆうた）

博士（医学）

論文内容の要旨

男児高位／中間位鎖肛に対する腹腔鏡補助下鎖肛手術（以下、本法）と従来法（後方矢状切開法）との中長期的な術後成績について、比較検討を行った。

本法（n=26；高位型 12 例、中間位型 14 例）と従来法（n=19；高位型 7 例、中間位型 12 例）について、術時年齢体重・手術時間・鎮痛薬投与量・術後画像評価（注腸造影・MRI）・術後排便状況（スコア係数）・合併症について評価を行った。

その結果、術時年齢体重は両病型ともに両群間に差は認められなかった。術後画像においても、両群間ともにプルスルー腸管は骨盤底筋群に正中部に位置しており、注腸造影で anal-angle 形成も両群間で差を認めなかった。術後排便評価では高位型で術後 7 年目以降、本法が従来法より有意に良好であったが、中間位型では有意差は認められなかった。高位型・中間位型ともに本法は従来法に比し排便スコアの変動係数が小さかった。また本法は従来法と比し、手術時間が有意に長く、肛門脱の頻度は高かったが、術後創部感染・術後疼痛が少なかった。

以上より本法は従来法に比べ安定した術後排便成績を得られ、特に高位型ではより良好な成績が得られる術式であると考えられる。